

地域と農の再生

—島根・山村の自給的世界からのメッセージ—

相川陽一

島根県中山間地域研究センター嘱託研究員
(浜田市弥栄自治区常駐：2009年～)

報告の構成

- (1) 「3.11」の衝撃の中で
- (2) 地域自立の手がかりはどこに
- (3) 自給の意味を見直す
 - 山村生活に学ぶもの
 - ふだん着の有機農業
 - 移り住む者／迎える者の接点
- (4) 生産力主義を超えて、何を獲得していくのか
 - 異質な主体間の摩擦を介した地域文化形成へ
 - 「新たな開拓の時代」をどう創るか

田舎の風景の中で思うこと

◇「地域」という言葉で、わたしたちは「人」を
思い描いている

※地域という言葉のブラックボックス性

◇人は人に惹かれて、移り住む

◇環境の過酷だから移り住む人が少ない、とは
言えない

※ふるさとの三里塚・・・・空港開発による過疎

※いま住んでいる弥栄・・・・いわゆる過疎

⇒高度成長期に置こされた＜2つの過疎＞

島根・山村の春夏秋冬



2010年1月

春



2010年

夏



2011年9月

秋



2010年10月

島根の仲間とめぐったふるさと：三里塚



経済成長の象徴的な存在である巨大な成田国際空港。うるさい・ものものしい空港に、小さな村が囲い込まれる。しかし、ここは、10年ほど前から「農家になりたい」若者が集う場になっている。人は人に惹かれて移り住む。風景もわざわざ、人を介して魅力が発現されるのだ。

(1) 3.11の衝撃の中で

○問われている日本社会のあり方：**支配と従属の相互依存**

基本発想：大規模／集中／単作・単品・単機能／遠距離

◇都市のための農産漁村、中央のための地方、「日本」のための地域⇒その裏面としての利益誘導政治と補助金行政（収奪される側からの同意調達・離反防止策）

◇**食・エネルギー・健康・自然環境を犠牲にしてきた半世紀**
都市をモデルにした自己理解を求められてきた農産漁村

◇長らく相互依存の構造を維持してきたが、1990年代以降、動揺が顕在化し、今次の原発震災によってその限界を露呈

○足元から未来を創る時代へ

◇**夢物語やノスタルジーと思われてきたライフスタイルへの着目**
基本発想：小規模／分散／複合／循環＝自給／近距離

⇒単なる懐古趣味を超えて何を創るべきか。ヒントは足元にある。

いま、地域の寛容性が試されるとき

○膨大な「強いられた移動」を生み出している「3. 11」

◇「どこの・だれ」が「どこの・だれに・どのように」受けとめられていくのか。移る人／迎える人の接点は？（文化接触）

◇地域社会の寛容性が試されている（移住／接触／対立／対話...）

半世紀にわたり弱体化してきた農山村が、共同体の復権・強化策としての移住受入や移住支援ではなく、異質な主体を包含し、新たな地域文化を創出する契機を生み出していけるかどうか。

◇半世紀にわたる農山村弱体化の経緯・要因を共有しながら、再評価すべき要素を見出し、農山村に生きる人びとの自己肯定を促すこと

⇒研究者・支援者が活躍する余地（従来型の、カネとモノが先に立つ支援方式では達成できない）。今回は最後のチャンスか（担い手の高齢化）

(2) 地域自立の手がかりはどこに

◇大前提

都市は自給できず、農産漁村のストックによって成立する
⇒都市の非生産者を人間モデルに与件化した社会設計は脆弱

◇農産漁村もまた、自給の基礎的基盤を弱体化させてきた

⇒国外のストック収奪※『地域自給と「農」の論理』ほか
⇒都市・平場農村をモデルとした自己理解
⇒実態の上でも、想像力の上でも、構造的劣位に置かれる

◇食とエネルギーの自立はもちろんのこと、財政や地域民主主義の局面において地域自立基盤を確保していけるのか、
という課題⇒分権化における自治能力の担保という問題

⇒地方切り捨ての論理としての「自立」ではなく、利益誘導政治・補助金依存への回帰でもなく、再分配の機能をめぐる公論形成（農山村の維持に関する公論形成）

をはかるために、地域自立と自給・近接経済に着目

(3) 自給の意味を見直す

◇一枚岩ではない農山村

平野部、山間部、中山間地

⇒日本列島上の約7割が山がちな地域

◇画一的な発想・施策の適用には限界あり

◇平野部と山村の違い——2つの農業に着目して

A「生きるための農業」

B「売るための農業」＝いわゆる産業としての農業

B＝農業という認識が強固にある

Aは山間地農業の基本形。従来は、取るに足らないものとみなされてきたが、そこに光を当てる営みが始まっている。

常駐フィールド

島根県浜田市弥栄自治区

わが家

◇概要 (2005年時点)

世帯数634戸

人口1,612人 ⇒ 1494人 (2010年時点)

高齢化率42.4%

面積105.5km²

人口密度15.3人/km²

◇生活施設

小学校1

中学校1

公民館2

市役所支所1

市役所出張所1

診療所・医院2

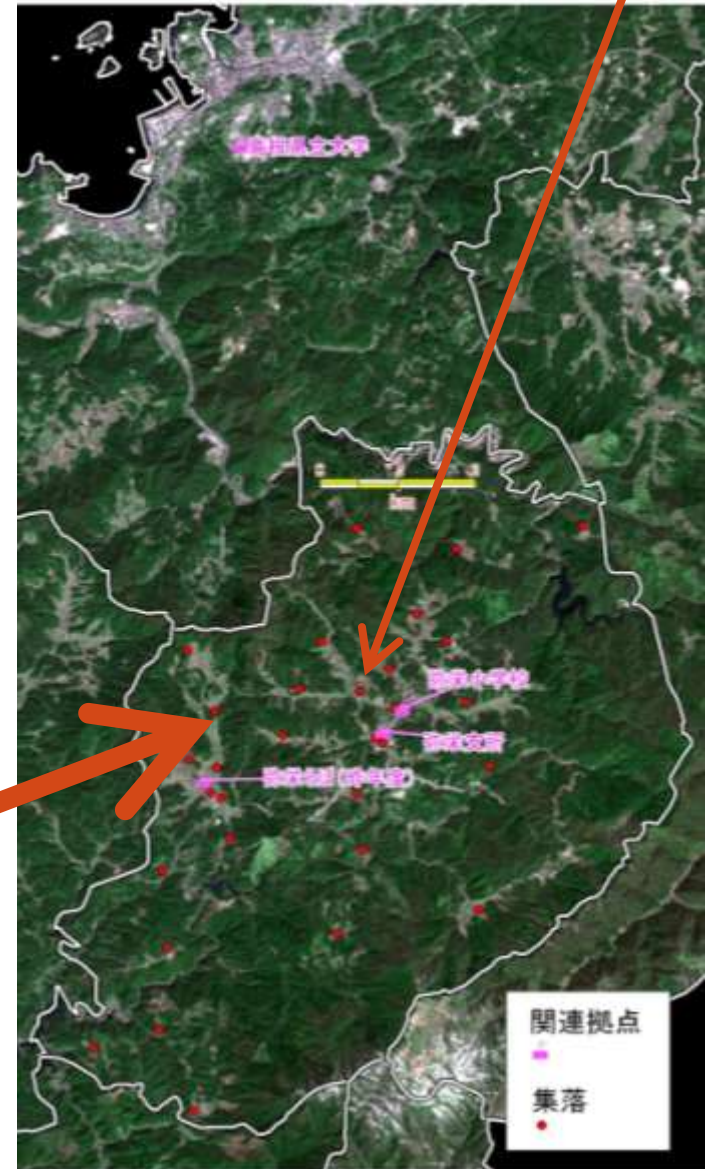
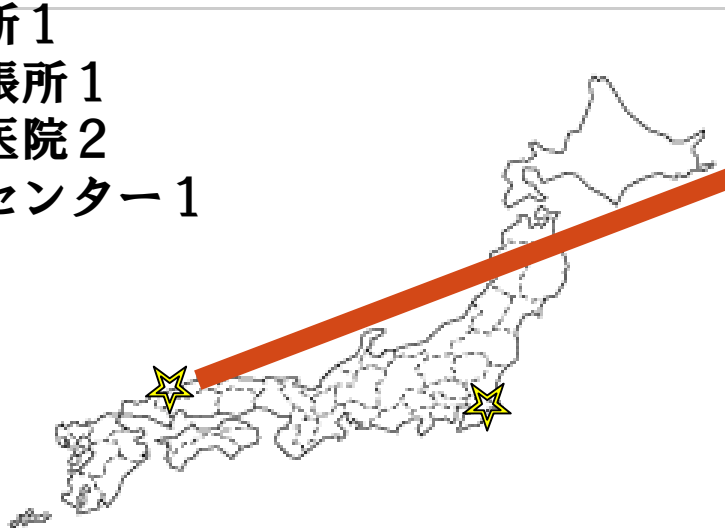
保健福祉センター1

◇都市へのアクセス

※浜田市街地…約20km

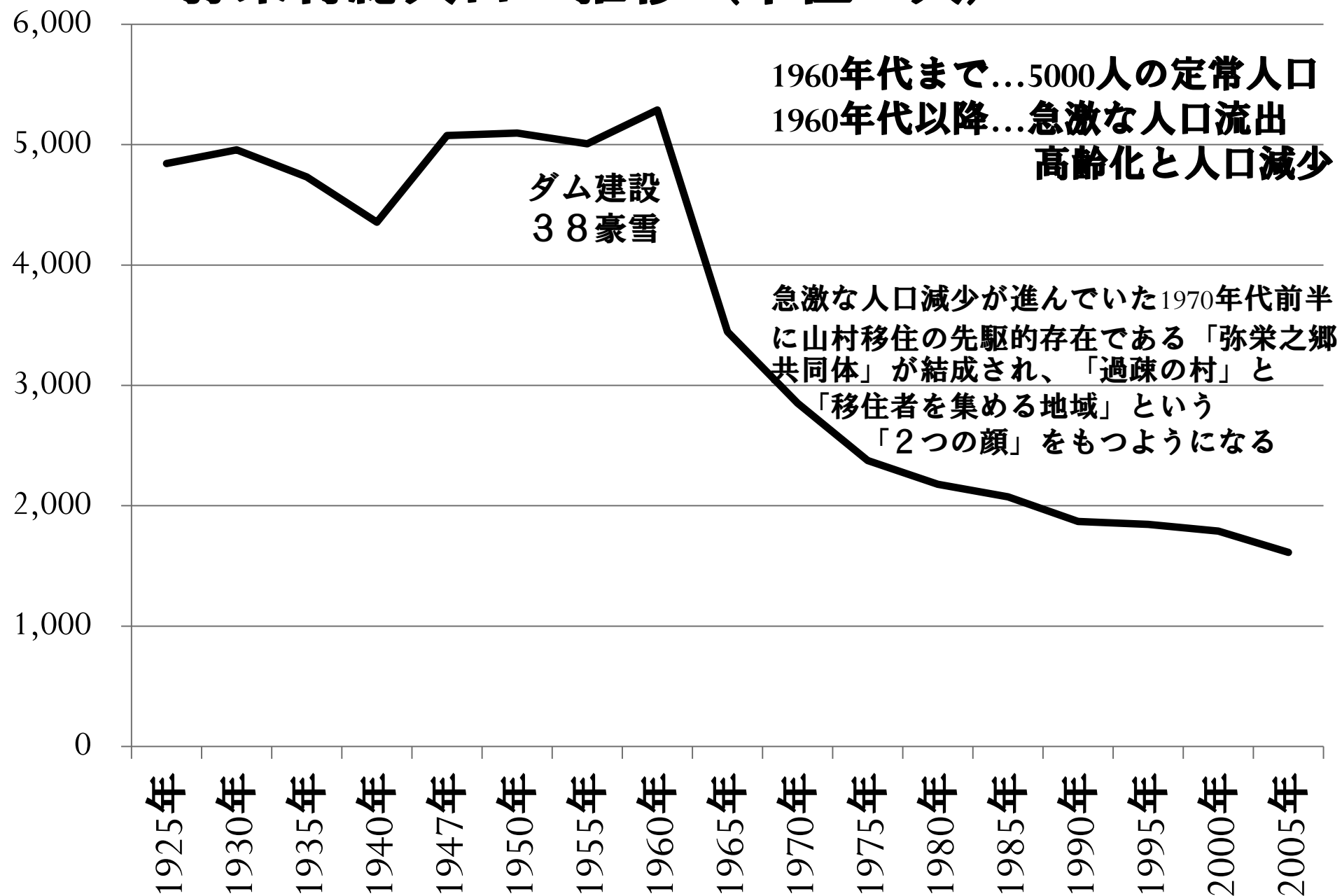
※広島市…約120km

※松江市…約120km



弥栄村総人口の推移（単位＝人）

出典：国勢調査（各年度）



山村の暮らしは兼業生活

広い山+小さな田畑をあわせた暮らし

※都市のエネルギー需要に合わせた自然資源の採掘・加工の歴史

早くから商品経済が浸透するが自給的な暮らしも残存（現存）

たたら製鉄
（衰退）
薪炭製造
+
水田
【～明治期】

一八年水害
（1943年）

薪炭製造（衰退）
木材伐出（衰退）
ダム工事（60年代～）
出稼ぎ（60年代～）
+
水田
【高度成長期】

公共事業
しいたけ
（衰退）
+
水田
【～90年代】

五八年水害（1983年）

?
+
水田
【現在】

これからを
どう生きて
いくのか
問②

現場の人と研究者
が向き合う
2つの問い

ダム建設（1960年～計4つ）

人口流出

三八豪雪（1963年）

（全人口の約30%が流出）

問① 山村に生きる人びとは何を生み出し、どう生きてきたのか

島根・弥栄町で出会う自給農の風景



刈り草マルチ

集落の共同畑（弥栄町稲代）、おばあちゃんが畑の主役



落葉・しいたけほだ木の投入
（弥栄町小坂集落）

30代の若手専業農家のハウス
若者も山の資源に注目している

たべものの自給
（≠商品生産）

+

肥料自給



山里の農業
本来の姿

売り物は山で
手に入れていた？

里山

炭

落ち葉

クマ
ザサ

刈り草

竹

山水

田畑

米ぬか

わら

畜舎

すまい

厩肥

下肥

山 と 水

北風が中国山地にあたって雪を降らせ、
雪どけ水が、農家のつくった水路をたどって田畑をうるおし、
川から海に流れ込む。水は、天と山からもらうもの。
冷たい雪解け水は、田の回りを一周させてから田に注ぎこむ。

「今年は雪が多かったけえ、田に水があるよ」

弥栄町小角・半農半山業で暮らしてきた方（70代）の言葉（2010年春）



山と土

「笹を入れた田んぼの米はうまいんで！」
そう言う農家が多い
自宅から徒歩5分の風景



山の笹を田んぼに

拡大図



自給農



肥料袋に抜いた
草を入れる



畑の脇で
抜いた草
を肥料化
する



マルチも
敷くが、
草も敷く



ほとんど肥料を
入れていない
という自給畑
20人の拡大家族
の胃袋を支える



わたしは草は焼かんよ。抜いた草はな、
ナイロンかぶせたり、袋に入れて逆さに
置いときゃあ、ええ肥えになるんよ。
(島根県) 柿木村にみんなで行って、
習うたんよ。

畑：約1反（減反畑）

耕作者：80代のおばあちゃん
消費者：同居家族と20人を超える
子・孫・ひ孫たち。休日は
「おっきいばあちゃん」の
野菜を取りに来る。今年から
孫たちが田んぼを始めた。
顔の見える食べ手たちの存在
が、ばあちゃんの畑づくりを
支えている。

自給農家は、ただものではない！（70代夫妻）

これは絵地図
聞き取りの後
作成して、
聞き手の前で
プレゼンする

2人の子供は結婚して
町外に 住んでいる。
現在は夫婦 2人暮らし。
背すじのシモンといた 71歳。

放牧地(もと田んぼ)

輪つとていふて
虫よけにしてのみ

家の周りで穫れた
お米と野菜は街に住む
子供に一家に送っている。
いまは秋作の種まきと定植に
忙しい。今年は秋植えの
なすがにも初挑戦!

2009年8月18日
横尾とみ・三浦美・相川陽一

『毎日のんびり暮らしてるけんね人間のほんですよ』

わたしは、わたしで、
でさな範囲で
水んばらな(畑業内の途中の
ひとこと)

毎日、こんな日射しに
当てられとなければ(今日も)
何でもなか

種子類!

おとうさんのつづき

このころ奥宮がなくなつた
面々がツツと又僕
達列り走し出した
が、これ、我々で来るより
若くは、所願の（？）より
今も田んぼをたどるに
生る植物は、種々あるが
香ばしと田んぼがあらば
生れてはけた
田んぼを走り回って
した。

泣き事を言てもしがた
ないけれど
これからどうなるのか
なりゆきにまかせるしか
ないなと



※この家では、家周りの庭と畑で、野菜・果樹・花木を含めて37種類が育つ
 ※特徴：高低差を利用した山水の散水装置／数畝の畑で少量多品種栽培／
 子や孫を食べ手に思い描きながらの作付と生産（顔の見える関係）など

山村地域の自給農業は 「ふだん着の有機農業」

◇「ふだん着の有機農業」とは？——報告者の造語

実践者自身は有機農業と意識しないが、地域循環型の生産方式や顔の見える相手との農産物のやり取りといった、有機農業の要素を多分に含んだ自給的農業

⇒観察者による聞き取り＝介入的な行為を通じて浮かび上がる発見的な要素
例えば、庭先にある数畝（反）の田畑に、畦の刈り草やクマザサや裏山の落ち葉や薪風呂の灰などを入れ、勾配のある地形の高低差を利用した水利システムで動力なしに山水を田畑に注ぎ入れ、少量多品種の野菜を栽培し、同居する家族や他出した子ども・孫・ひ孫たちと生産物をシェアし、余剰分を直売に出荷する「自給＋α農業」

⇒お金だけではなく「やりがい」や「喜び」も野菜と交換されている

⇒有機農業であると同時に「本来農業」ではないか？

そこには学ぶべきものがあるのでは？⇒移住者が求めるものとの接点

有機、自然農、不耕起……山間地への新規参入希望者が描く農業

このような「夢の描き方」は若者の都市と山間地の未来像を映し出す

「生き方としての自給」とは？

◇専業／兼業／自給的農家というカテゴリがある

自給とは、既存の発想では規模の大小を指す指標

◇しかし、わたしが自給農の実践者から学んだのは

- ・「自給とは生き方である」そして
- ・「自給とは他者とつながりあうための生き方である」
という気づきだった

◇自給とは経営規模の大小ではなく「生き方」を指す言葉

- ・専業も／兼業も／家庭菜園の人も自給できる。
- ・食だけでなく、エネルギーも医療も自給対象になる

※例「人間は、本来自給して生きるべきだと思うんです」

福原圧史さん（NPO法人ゆうきびと代表・吉賀町）

出典：島根県柿木村公式ウェブサイトより

相互行為としての自給

(1) 自給自足と自給、あるいは地域自給の違い

◇自給自足＝孤独な生存維持（他者にわずらわされない生活）

◇自給生活＝自立して他者とつながる暮らし

◇地域自給＝自立した主体が近接圏内でつながり相互に自給力を高める

(2) 目的：つながりゆくための自給＝「開かれた自給」

◇自給＝近くで何とかする ⇔ 遠くから資材を仕入れる

小規模／近接／複合 ⇔ 大規模／遠隔／単機能

〔範囲の経済性〕

〔規模の経済性〕

(3) 効果：自給はつながりの結節点になる

◇自然とのつながり＝循環 〔自然〕 借りものでは

◇過去・歴史とのつながり 〔歴史〕 ⇒ ない暮らし

◇いま生きている人とのつながり 〔ひと〕 生き方へ

(4) 生産力主義を超えて、 何を獲得していくのか

- ◇足元から未来を創る。
- ◇単なる懐古でも保守復権でもなく、異質なものの同士の接触・摩擦・対立を介した、新たな地域文化の形成に動きだすこと（対抗的相補性の発想）。
- ◇山間地が続いていくとすれば、根底には自給の思想が不可欠だろう
お仕着せの開発・施策ではなく、歴史・風土に根ざした暮らしの自己肯定ができ、異質性への寛容性をもつ農山村地域が、
これからの地方社会をリードしていく。今後も都市からの人口移動があるとするれば、そのような地域に人びとは動いていくだろう。そのためには、何が必要か。フィールドで起きている動きと現地から感じ取ったメッセージを紹介したい。

実践例 (一部)

「役所まかせ」「専門家まかせ」「ないものねだり」
「補助金依存」・・・そんなところに、人は来ない。

おカネをかけずに汗をかき、楽しく・面白く、ちょっと
の工夫でできること。やっていて面白いこと。

そこに住んでいる人が面白いと思うことを
感知していく力が、実践研究には求められている。

自給畑で、いつも野菜が余っちゃう。
ナスもキュウリもいっぱいあるけど、
ちょっと曲がると出荷できないんだよね。
⇒⇒そうだ、団地いこう！

～「てい～む・やさかん家」の軽トラ市～



**ヤング農家3名+私で
2011年に結成。**

**高齢化して、買物が大変な
おばあちゃん・おじいちゃんが多い団地と提携して、
月に1回、定期市を開催。**

**農家なら誰でも持ってる
軽トラを売り場にして、
どこでも青空市、展開中！**

**遠くの大都市までいなくても、
小さな町だって、
おいしくて新鮮な野菜を
待ってる人は必ずいる！**

突然ですが、あなたも木を切ってみませんか？
野菜の産直があるんだから、
「木の産直」だって、全然アリですよ？
～「木出しの会」の伐採活動～



山のプロと
いっしょに
「小さな林業」を
実践する活動です



素敵な山プロに、
木のゆわえ方を
教わります

チェーンソーの
使い方も習います



みんなで切った木は
近所の材木屋さんの
庭にストック。
たまってきたら、
隣まちの原木市場に
直売に行きます

「小さな農林業」という方向性

◇大規模化・集約化・単作化・大都市への遠距離輸送

この路線を取る限り、山間地域、大都市からの遠隔地は「永遠の劣位」を脱せない（あるいは多額の投資や様々な無理をかけてキャッチアップするか⇒それでは「底上げ」は難しい）

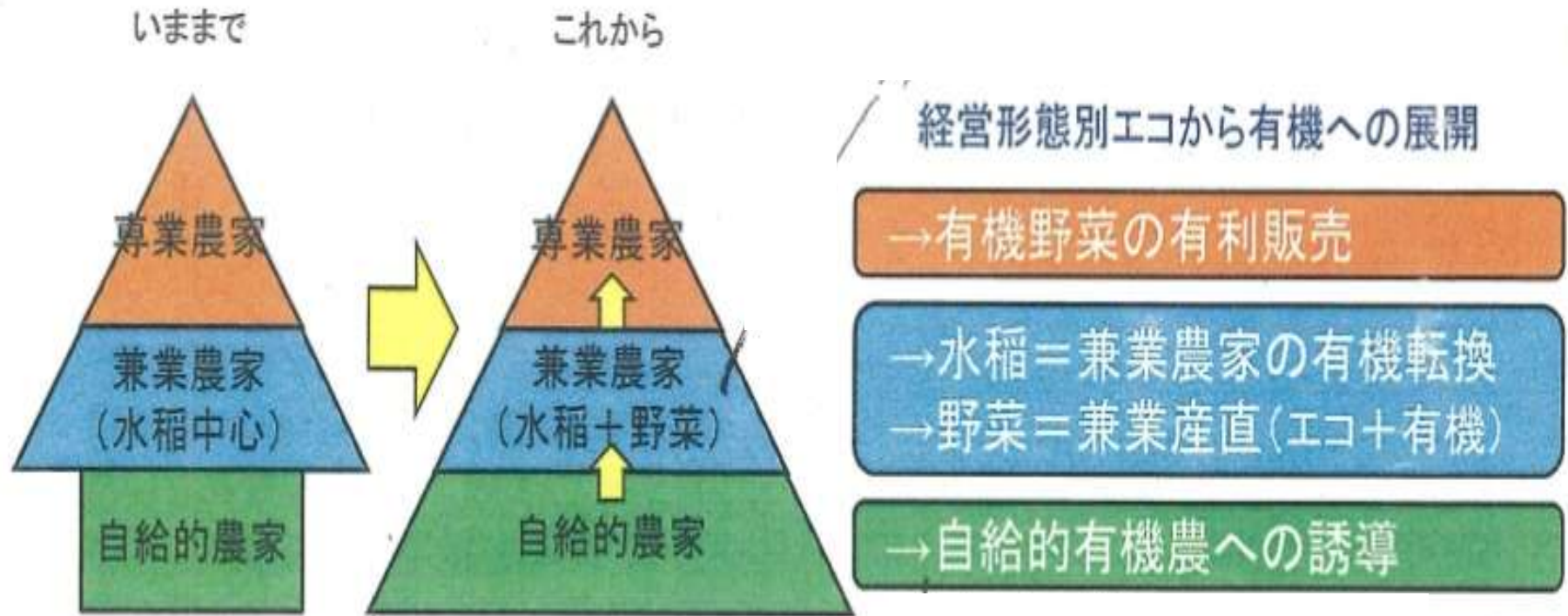
◇小規模・分散・複合・山村－小都市の近接地域特性 をふまえ

「小さな農業」・「小さな林業」の同時多発的な展開によって、住んで楽しい地域を創り出し、維持していく方が無理のない未来

⇒「儲かる農業」「強い農業」「農業ビジネス」「集約・団地化・効率化」といった加熱イデオロギーの逆を行くこと

⇒農地も林地も人も、一か所に集約して特定者に任せるのではなく、戸数や従事者を減らさないことが重要。むしろ小規模な実践者を増やしていくべき。農業で言えば、兼業農家や零細規模の農家が専業農家を支え、地域を支えているという認識をもつことが重要。

山間地域の農家構成に関する これからの方向性（イメージ図）



※条件不利な山間地域では、専業農家を核として小規模で多様な農家が担い手となる。
※自給的農家への参入と各階層の農家が上位にステップアップできる仕組みづくりが必要。

出所：「山間地域の担い手づくりと有機農業の展開」（浜田市弥栄支所産業課、2011年）

小規模・分散型／兼業・自給農を 地域農業の守り手として位置づける根拠

経営形態による担い手のイメージ

専業農家 1戸 × @所得300万円・経営規模50a ⇒ 合計300万円・50a

兼業農家 12戸 × @所得 25万円・経営規模 5a ⇒ 合計300万円・60a

※条件不利な山間地域では、1戸の専業よりも多くの小規模兼業が現実になっている。

出所：「山間地域の担い手づくりと有機農業の展開」（浜田市弥栄支所産業課、2011年）

同額の所得（300万円）を

（1）一人の農家が稼ぎ出すパターン

（2）複数（ここでは12戸）で稼ぎ出すパターン

それぞれを比較すると、

（2）の方が、より広い面積を維持できる

⇒農家戸数を減らさずに、戸数を維持する政策展開が必要となる

大規模化や「勝てる農業」「農業ビジネス」に多くの農家が巻き込まれていくなかで「私たちはこうして生きていく」という旗を掲げた山村がある。そのとき、何をよりどころにしていくのか。足元から未来を創るヒントのひとつが本来農業としての有機農業。

弥栄が目指す山間農業の方向性



出所：「第二回やさか有機農業市民講座」チラシ裏面より転載（浜田市弥栄支所産業課、2011年）

結論としての問題提起

経済成長をもとめる加熱イデオロギーから
いかにして自由になり、どう生きていくか

- ◇山間地の特徴は、長らく条件不利地としてみなされてきた。
- ◇山間地に生きる人びと自身が、平地や大都市との競争にまきこまれる
途を選んできた面もある（競争への適応と失敗）。
- ◇山間地がこの路線を取り続け限り、劣等感は消えることがない。
自身が生をつむいできた生存基盤を「不利条件」と自認する地域に
移り住む者も多くはないだろう。
- ◇だが少しずつ事態は動いてきた。いま、農山村に生きる人びとが
どのような未来を描けるのかが試されている。
- ◇「豊かさ」や「幸福」の定義をずらし、風土・暮らしに根ざした
地域社会の創りなおしを模索する地域・ひと・自治体がある。
- ⇒現実的に妥当する解は常に現場にある。現場なき社会設計に先走る
のではなく、現場から起きている同時多発的な実践に学ぶべき。
- ◇単なる懐古主義でも、過疎化への反省なき復古主義でもなく、異質な
主体間の出会い、対話、摩擦、対立を介した新たな地域文化の創出
＝「新たな開拓の時代」に向かっていくためには、いま何が必要と
されているのか⇒ひとつの解としての「小さな農林業」と「自給」

ありがとうございました

つづく

